

外郎売【ふりがな付き本文】

【第一節】

せつしゃおやかた もうす おたちあい なか
拙者親方と申すは、お立会の中うちに、

ござんじ おかた
御存じのお方もござりませうが、

おえど た にじゅうりかみがた
お江戸を發たつて二十里上方、

そうしゅうおだわらいつしきまち おすぎなされて
相州小田原一色町をお過ぎなされて、

あおもものちよう のぼり
青物町を登りへおいでなさるれば、

らんかんばしとらやふじえもん
欄干橋虎屋藤衛門、

ただいま ていはついたして えんさい な
只今は剃髮致して、円斉と名のりまする。

がんちよう おおつごもり おて いれます こくすり
元朝より、大晦日まで、お手に入れます此の薬は、

むかし くに とうじん ういろう ひと ちよう
昔ちんの国の唐人、外郎という人、わが朝ちようへ来たり、

みかど さんだい おりから
帝へ参内の折りから、

くすり ふかくかごめおき
この薬を深く籠こめ置き、

もち とき いちりゆうづつ
用ゆる時は 一粒ずつ、

かんむり ま とりだす
冠のすき間より取り出す。

な みかど とおちんこう たまわる
よつてその名を帝より、透頂香と賜わる。

すなわちもし いただき、すく におい、かいて とうちんこう、もうす。
即 文字には「頂き、透く、香い」と書いて「透頂香」と申す。

ただいま くすり、こと ほか、世 せじょう 上に弘まり

ほうぼう にせかんばん、いだ
方々に偽看板を出し、

いや おだわら、はいたわら たわら、すみだわら もうせども
イヤ、小田原の、灰 俵の、さん 俵の、炭 俵のと、いろいろに申せども、

ひらがな しる
平仮名をもって「いろいろ」と記せしは、親方 円 斎ばかり。

おたちあい、なか あたみ、とう ざわ、とうじ おでなさる
もしやお立会いの中うちに熱海か塔の沢へ、湯治にお出なさるか、

いせごさんごう、おり
または伊勢御参宮の折からは、

かならずもんい
必ず門違かどちがいなされますな。

おかみ みぎ、かた おくだり、ひだりがわ
お上ならば右の方、お下りなれば左側、

はっぼう やつつとう、おもて みつつむねぎよくどうづくり
八方が八つ棟、表が三つ棟 玉堂造り。

はふ きく、きり ごもん、ごしやめん
破風には菊に桐のとうの御紋を御赦免あつて、

けいずただしきくすり
系図正しき薬でござる。

【第二節】

いやさいまえ かめい、じまん もうして
イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、

ござんじ かた、せいみ こししょう、まるのみ
ご存知ない方には、正身の胡椒の丸呑み、

しらかわよふね ひとつぶたべかけて きみあい おめ
白河夜船、さらば一粒食べかけてその気味合いをお目にかけましょう。

まずくすりこの薬をかように一粒舌の上にのせまして、

はらうち おさめます いや いえぬ
腹内へ納めまするとイヤどうも言えぬは、

い しん はい かん
胃・心・肺・肝がすこやかになりて

くんぷうこう きたり こうちゅうびりよう しょう
薫風候より来たり、口中微涼を生ずるが如し。

ぎよちよう きのこ めんるい くいあわせ
魚鳥・茸・麺類の食い合わせ、

ほか まんびようそっこう ことかみ ごとし
その他、万病速効ある事神の如し。

さて、この薬、第一の奇妙には、

した ぜにこま にげる
舌のまわることが、銭独楽がはだしで逃げる。

ひよつと舌がまわり出すと、矢も楯もたたらぬじゃ。

【第三節】

そりやそりや、そらそりや、まわってきたわ、まわってくるわ。

あわやこう さたらなした かはさはおん
アワヤ候、サタラナ舌に、カ牙サ歯音、

はま ふたつ くちびる けいちよう かいごう
ハマの二つは唇の軽重、開合さわやかに、

あかさたなはまやらわ、おこそこのほもよろお。

ひとつ ひとつ へぎへぎに へぎほし はじかみ、 ぼんまめ ぼんまい ぼん
盆豆 盆米 盆ごぼう、

つみたで つみまめ さんしょう しょしゃやま しゃそうじょう
摘み蓼 つみ豆 つみ山 椒、書写山の社僧正、

こなまい なまかみ こなまい なまかみ しょうまい せいかみ
粉米の生噛み 粉米の生噛み こん小米のこ生噛み、

しゆす ひしゆす しゆす うすぎぬちん
縹子・緋縹子・縹子・縹珍、

おや かひようえ こ かひようえ おやかひようえ こしかひようえ おやかひようえ
親も嘉兵衛 子も嘉兵衛、親子嘉兵衛、子子嘉兵衛 子子嘉兵衛、親子嘉兵衛、

ふるくり き ふるきりくち あまがつば ばんかつば
古栗の木の古切口、雨合羽か番合羽か、

きさま きやはん かわきやはん われら きやはん かわきやはん
貴様の脚絆も皮脚絆、我等が脚絆も皮脚絆、

しりかわはかま ほころび みはりはりなが
尻革 袴のしつ綻びを、三針針長にちよと縫うて、

ぬう ぶんだせ
縫うてちよとぶん出せ、

かわらなでしこ のせきちく のらによらい のらによらい みのりようによらい ろくのらによらい
河原撫子、野石竹、野良如来、野良如来、三野良如来に、六野良如来。

いっすんさき ごしよほとけ おけつまず ほそみぞ
一寸先の御小仏に御蹴躓きやるな、細溝にどじよによるり。

きよう なまたら ならなまがくがつお ちよと四五貫目、
京の生鱈 奈良生学 鰹、

おちゃだち ちゃだち たち ちゃだち
お茶立ちよ茶立ちよちやつと立ちよ茶立ちよ、

あおだけちやせん おちや だち
青竹茶筌でお茶ちやと立ちよ。

【第四節】

くる きたる なに くる たかの やま こぞう
来るは来るは何が来る、高野の山のおこけら小僧、

たぬきひやくひき はしひやくぜん てんもくひやくはい ぼうはつびやくほん
狸百匹 箸百膳 天目百杯 棒八百本。

ぶぐ ばぐ ぶぐ
武具・馬具・武具・馬具・三武具馬具、合わせて武具・馬具・六武具馬具、

きく くり きくくり みきくり あわせてきくり ろくきくり
菊、栗、菊栗、三菊栗、合わせて菊栗、六菊栗。

むぎ ちり むぎちり みむぎちり あわせてむぎちり ろくむぎちり
麦、塵、麦塵、三麦塵、合わせて麦塵、六麦塵。

なげし ながなぎなた だれ ながなぎなた
あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。

むこう ごまから え ごまから しんごまから
向こうの胡麻殻は 荏の胡麻殻か、真胡麻殻か、

ほん しんごまから
あれこそ本の真胡麻殻。

ふうしゃ お しょうほうし き しょうほうし
がらびいがらびい風車。起きやがれ小法師、起きやがれ小法師、

さくや こぼして こぼした
昨夜も溢してまた溢した。

たあふほほ、たあふほほ、ちりからちりから、つつたつぽ、たつぽたつぽ 一千蛸。

おちたらにてしよく、
落ちたら煮て 食お、

に て やいて くわぬもの ごとくてつゆみ くまどうじ
煮ても焼いても食わぬ物は、五徳鉄弓・かな熊童子に、

いしくま いしもち とらぐま たら
石熊・石持ち・虎熊・虎きす、

なか とうじ らしやもん いばらぎだつてい くりいこう おむし
中にも 東寺の羅生門には 茨木童子がうで栗五合 つかんでお蒸しやる。

かれ らいひかり ひざもとさらさ
彼の頼光の膝元去らず。

【第五節】

ふな きんかん しいたけ こうだん
鮒・金柑・椎茸、さだめて後段な、

そばきり そうめん うどん ぐどん しょうしんぱつち
蕎麦切り・素麺、饅頭か愚鈍な小新発知。

しょうたな しょうした しょうおけ しょうみそ こある しょうしゃくししょうもってこきくってしょうよ
小棚の小下の小桶に小味噌が小有るぞ、小杓子小持って小掬って小寄せ。

がつてん ころえたんぼ かわさき・かながわ・ほどがや・とつか はしっていけば
おつと合点だ、心得田圃の川崎・神奈川・程ヶ谷・戸塚は走って行けば、

きゅう すりむくみり ふじさわ ひらつか おおいそがし
灸を擦り剥く三里ばかりか、藤沢、平塚、大磯がしや

こいそ やど ななつおき そうてんそうそう そうしゅうおだわら とおるいただきかおり
小磯の宿を七つ起きして、早天早々、相州小田原、透頂香。

かくれござらぬきせんぐんしゅう はな ごえど はな
隠れ御座らぬ貴賤群衆の、花の御江戸の花ういろう。

あれ はな みて べにいろ おやわらぎ いろ
アレあの花を見て、御心を御和らぎやと言う、

さんこ はいこ いたる こ ういろう べひょうばん ごぞんじない もうされ
産子・這子に至るまで、此の外郎の御評判、御存じ無いとは申されまいつぶり、

かどだせぼうだせ まゆ
角出せ棒出せぼう眉に、

うすきすりばち くわばらくわばらくわばら
臼杵搦鉢ばちばち桑原桑原桑原と、

はめ はずしてきよう なんしげるさま あげねば
羽目を外して今日御出での何茂様に、上げねばならぬ、売らねばならぬと、

いき ひっぱり とうほうせかい くすり もとしめ やくしによらい しょうらん
息せい引っぱり、東方世界の薬の元締、薬師如来も照覧あれと、

ほほうやまっとういろう
ホホ敬つて外郎はいらっしやりませぬか。